



大正・昭和の絵雑誌

式 淳子

寄贈された大正・昭和の絵雑誌

大相撲で有名な両国。ここにある江戸東京博物館が、七階に図書室を併設しているのをご存じでしょうか？ この図書室は、江戸、東京の歴史や文化に関する本を中心に収集していますので、小中学生の調べ学習に使える本はある程度そろっています。ただ残念ながら、〃今〃の小さな子どもたちが楽しく読めるような絵本類はほとんどありません。しかし、歴史博物館の図書室ですから、〃今〃のご年輩の方々が、〃かつて〃小さな子どもだったときに読

んだ本の管理・保存はしているのです。

引つ越しや改築などで家の中の整理をされる方から、まとまった寄贈を受けることがあります。最近も、大正末から昭和の初めに発行された子ども向けの絵雑誌が、ある方から送られてきました。『幼年畫報』『子供之友』『ボッチャン』『子供界』『キュービー』『コードモアサヒ』『男子幼稚園』『女子幼稚園』『學校へアガルマデ』『ツバメノオウチ』などなど、ざっと数えても三十種以上の絵雑誌がありました。表紙を眺めるだけでも、その色彩の豊かさ、斬新なデザインに目を奪われます。そして当時、幼児から

小学校の低学年向けの雑誌がこれ程多く出版されていたことに驚かされました。

このような幼年向けの絵雑誌は、印刷技術の発達で多色刷りが可能となった明治末ごろから出版されるようになったようです。日露戦争が終わり、いわゆる大正デモクラシーと呼ばれている時代を迎え、子どもの個性や自由な考え方を尊重する風潮が高まります。子どもがもっているみずみずしい感性を引き出し、育てるために、芸術性の高い文芸雑誌や、絵雑誌が数多く創刊されました。『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅰ』（鳥越信編 ミネルヴァ書房）によりますと、大正時代の一五年間で五十種以上の絵雑誌が創刊されているということです。子どもの教育への並々ならぬ世間の関心を感じられます。

東京女子高等師範学校の教授や同附属幼稚園の主事を勤めた倉橋惣三氏は、『ツバメノオウチ 第四巻 第五号（一九三二・五）』（フレーベル館）の「お母

さまと保母さんの講座 第一回」に「絵雑誌の見せ方」を以下のようにつづっています。

「子どもは自分で考えるところがあり、楽しむところがあり、その絵の中へ自分を没頭させているのであるから、その大切な心境を乱してはならない。」

確かに子どもが受け入れやすく、熱中でき、かつモダンなデザインで表現されている絵が数多く載せられています。また、

「子どもの質問は、教えて貰って正しい知識を得ることよりも、子ども自身で疑問をもつということに、何倍も大きい値打ちをもつものなのであるから。」

とあり、この考えは、私たち司書が子どもたちからのレファレンスを受ける際に、今も基本としていることです。

これらの絵雑誌の画家名を見ると、昭和二年に結

成された日本童画家協会のメンバー、岡本帰一、川上四郎、清水良雄、武井武雄、初山滋、深沢省三、

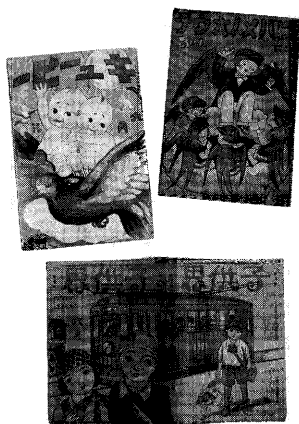
村山知義ほか、童画の第一人者の名前が並んでいます。『キューピー』（オサナゴ社）など、画家名が明記されていないものもあるのですが、それらも美しい色合いの絵から少々シユールな印象を受ける絵まで、一冊十数ページでありながら、バラエティに富んでいます。たとえば美しいハトに乗って大空を飛ぶキューピーや、眼鏡をかけた猫、子どもの髪や目の色も黒とは限らず、緑であるなど、子どもの想像力を解放する一助となるような絵が多いのです。

大正末に発行されたものは、かわいらしい帽子や靴を履き、モダンなファッションに身を包んだ子どもたちの絵が多く見られますが、昭和一〇年近くになりますと、徐々に国旗を掲げた兵隊の格好をした子どもの絵が目立ってきます。雑誌はこのような時代背景も敏感に映し出します。

絵雑誌の保存管理について

さて、貴重な絵雑誌の寄贈を受け、博物館資料として活用させていただくまでを少し記しておきたいと思います。これらは保存状態がかなりよかったです。ですが、それでも八〇年以上も前に発行されたものが多くあります。まず当館では、殺虫、殺菌を行うために、本に害のない薬品で燻蒸作業を行います。その後、一ページ一ページ、はけや柔らかい布、場合によっては消しゴムなどを使って、手作業でクリーニングをします。それからようやく書誌データの入力に取りかかります。これは一冊ごとのカルテになるようなものですから、その本から読み取れる情報や状態を入力し、一冊ずつの登録番号とバーコードを付与して管理していきます。

特に年月を経た本によっては、ステープラがさび、そこから紙も劣化していくなど、破損が著しいもの



▲「ツバメノウチ」(第4巻第5号/1932.5 フレーベル館)

『子供界』(第8巻第7号/1926.6 宏文社)

『キュービー』(第6巻第9号/1927.9 オサナゴ社)

資料提供: 東京都江戸東京博物館

<http://www.edo-tokyo-museum.or.jp/>

もあります。そこで本専門の修復業者の方に修理をお願いします。修復の方法は、その図書の利用の仕方によって変わります。一般の方々の利用に供する本は、博物館資料として原状回復を可能にすること念頭に置きながらも、ある程度の強度は保てるような修復をしていただきます。一方、今回の絵雑誌のように、普段は収蔵庫に収め、展覧会に使用したり、一般の方々へ制限を設けて利用していただくものに関しては、手を加え過ぎないように修復をお願い

いています。破れてしまった所は和紙などを似たような色に染めて補強をしたり、ページがはずれてしまっていれば糸綴じにしたり、違和感がないようにしながらしかも、後年に修復したことがわかるようにします。

絵雑誌は絵で多くを表現している分、時代の移り変わりが顕著にわかり、本の素材や印刷技術からその時代背景がうかがえるので、そうした魅力を失わないような保存管理が必要となるのです。現在はまだ整理中ですが、なるべく早く資料として活かせるよう、また未来にも伝えていけるようにしていきたいと思っています。

最後に、図書室では、小中学生を対象に「夏休み！歴史学習相談」を行い、本を紹介しながら自由研究や課題を解決するお手伝いをしています。この機会にぜひ図書室をご利用ください。

(江戸東京博物館 司書)